今月の窓

食料についての一考察

気候変動や生物多様性、地政学的な場面等で食料の安全保障がいろいろな場で議論されている昨今であるが、そもそも食べ物とは何であろうか。

なぜ人は食べるのか、という根本に立ち戻ると、食べることは生命の維持であり、子孫という種を保存するための構成要素を体内に摂取するためと考えられる。

では、食料とはどのような要素が必要になってくるのだろうか？マクロ栄養素という点では、炭水化物、脂質、タンパク質が必要であることは言うまでもなく、元素としては酸素、炭素、水素、窒素が身体の95％を占める。残る５％がミネラル分と呼ばれるカルシウム、リン、カリウムなどからなる鉱物の成分となる。ミネラル分は身体の構成材料としての骨や歯、生体機能調整としての浸透圧調整や神経伝達調整、またタンパク質の一部として酵素反応を起こし、代謝系全体を回すことに関与することが知られている。年齢に応じ栄養ニーズは変わってくるものの、食料を手段とする栄養摂取は人生の終わりまで変わらない。栄養の充足と運動による体づくり、休息などと共に余分な栄養素の排出は健康な生活実現のために常に重要である。この栄養充足の手段が食料であり、食べる行為である。

食料の生産とは何であろうか？狩猟、木の実の採取から始まり、より望ましい食材の選抜、育種を加えた産業としての農業、畜産業、漁業につながってきているものが現在の食料生産であると捉えられる。食料生産の拡大により、世界の人口が増加し、さらなる食料が必要になってきている。その一方で、経済格差による過不足、フードロス、化石資源に頼る生産や家畜に由来する温室効果ガス（GHG）が社会問題となってきており、エネルギー問題と共に無視できないところまで来ている。どのように対応するかの議論は広がり、食生活を変えさせるようなインパクトを持つものになりつつあると考えられる。

これまでの政策では食料は人間のためのものとして議論されてきた。今後の食料生産は、気候変動の抑制や生物多様性の保全を含め、地球に負担をかけてはならないというフェーズに来ていると考えられる。金融機関においても良いことに対するインベストメント（投資）に加え、良くないことに対するダイベストメント（投資引上げ）が求められることになる。

本号はGHGに関連する農事業環境と栄養素の一つであるカルシウムという一見すると異なる話題が同居している。しかしながら、この二つは、どちらも持続的な生物種の維持という点で必須なものととらえられる。人の健康を考えると、各種栄養素がバランスよく、適量が摂取されることが基本となる。地球の健康を考慮すると、効率的な生産手法で環境に配慮した食料生産を行わなければならない。

本号が、健全な社会の在り方をとらえるヒントとなることを望みたい。

（（株）農林中金総合研究所 理事研究員　藤島義之・ふじしま よしゆき）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/